International Association of Music Libraries, Archives and Documentation Centres
Japanese Branch

No. 26

NEWSLETTER
国際音楽資料情報協会日本支部

December 25, 2005

ISSN 1347-7277

IAML日本支部第38回例会報告

日　時：2005年5月14日（土）
　　午後2時〜4時
場　所：国立音楽大学附属図書館自由閲覧室
発表者：山田高誌（日本学術振興会特別研究員・バーリ音楽院附属音楽研究所〝カーサ・ピッチンニ〞客員研究員）
題　目：チマローザ《秘密の結婚》(1792)の秘密
　　国立音楽大学附属図書館で新発見のナポリ上演版(1793)第一ヴァージョン楽譜の特定と、差し替えアリアについ

チマローザ作曲《秘密の結婚》(1792)の秘密：国立音楽大学にて新発見されたナポリ版（1793）楽譜の特定と、2曲の差し替えアリアについて

山田高誌

チマローザ作曲の喜劇オペラ《秘密の結婚》は、今日まで連綿と世界各地の劇場のレパートリとして受容されてきているように、18世紀後期のイタリア・オペラを代表する作品として知られている。現在その姿は、1799年から行われ始めた印刷楽譜[1]、ならびに1792年ウィーン初演版を基に作られたF.ドナトーニ校訂によるリコルディ社版(Donatoni, 1976)を基にする演奏によって知られているが、初演から後、19世紀にかけて全欧に伝播していく段階においては、種々の地方ヴァージョンが用いられていた。これらの異版は、各劇場や、地方の趣味を明らかにする上で重要な資料となるが、中でも、ウィーンでの初演後、故郷のナポリに帰還することとなったチマローザ自身が変更を施した1793年のナポリ上演版については、その作曲家自身の作風、ならびに18世紀のオペラ製作の中心地として長年独自の特徴を持ち続けていたナポリという場所の音楽趣味を明らかにするものとして、とりわけ注目に値すると思われる。しかし、現在までその1793年ナポリ版台本に合致する楽譜が失われたものと考えられてきたことから、その具体的な研究は台本に関するものに限られ、ナポリ版の音楽そのものについての研究は行われてこなかった。

1.《秘密の結婚　*Il Matrimonio segreto*》のウィーン初演(1792)と、ナポリ初演(1793)

ナポリで業績をあげたチマローザは、1787年から91年までの間、エカテリーナ女帝(在位1762-1796)に招かれ、ロシア宮廷の楽長としてサンクトペテルブルグに滞在することとなった。しかし、エカテリーナからの評価が芳しくなかったことに加え(Mooser, 1949: p.159; 1951: p.524)、宮廷はトルコとの戦争のための戦費調達を目的とし音楽家の削減を進めていたこともあり、チマローザは4年間の仕事を終えると、その後の契約更新をせず、1791年6月3日(Mooser, 1949, p.165) にサンクトペテルブルグを離れ、ワルシャワを経て1791年末にウィーンに到着する。なおこのウィーンでは、前トスカーナ大公であったレオポルト二世が神聖ローマ帝国皇帝として1790年から即位しており、音楽においてもイタリア物が好まれる世相となっていたばかりか、このレオポルト二世自身、トスカーナ時代からチマローザの熱烈な愛好者であったことから(Della Corte, 1936: p.84)、すぐにチマローザはウィーンの宮廷楽長として迎え入れられた。

《秘密の結婚》は、このような背景の下、1792年2月7日にウィーン・ブルク劇場にて初演され、続く2月9日の2回目の公演においてレオポルト二世の臨席のもと上演[2]された。皇帝は、このオペラを大変気に入り、2月9日の上演後、出演者全員を宴会に招いた後にもう一度全曲をアンコールさせ、これはオペラ史における唯一のエピソードとして知られることとなる[3]。

1793年3月1日にレオポルト二世が崩御し、フランツ二世皇帝が即位すると、宮廷はそれまでのイタリア音楽家への態度を変化させ、ドイツ派のサリエーリを楽長に迎えることになった。このような政治的事情故か、チマローザはすぐにウィーンを離れ、故郷のナポリに帰還する。チマローザがいつナポリに帰国したのか、そして、いつ《秘密の結婚》ナポリ版が、ナポリの民間劇場の一つであるフィオレンティーニ劇場[4]で上演されたのか、それらの正確な時期についてはこれまで不詳とされ、おおよそ、その帰還の時期はナポリ・ヌォーヴォ劇場[5]において1793年６月19日[6]に上演された、チマローザ作曲、G.パロンバ台本《トラキアの愛人 *I Traci amanti*》の日程前となる、1793年4月から5月の時期にかけてであろうと推測されてきた。

しかし筆者は、この公演を手がけたフィオレンティーニ劇場支配人コレッタによる、貸衣装屋クティッロへの支払い記録[7]の中に、ナポリ初演日程の特定に関る記述[8]を見つけることにより、この初演が1793年4月の第1週目であったことを新たに特定した。

ナポリの民間劇場での喜劇オペラの上演には、必ずナポリ色を作品の中に出すことが土地/劇場

の伝統として常に求められていたが、この《秘密の結婚》の上演に際してもそれはまた例外ではなく、支配人はチマローザにいくつかの手直しを求めている。この経緯については、ナポリ初演台本における序文に読むことができる[9]。

ナポリにおいてもこの作品は大変反響を得、ある伝記作家は、ナポリでは5ヶ月のうちに110回の上演[10]が行われたと報告し、さらに1818年に出版されたマンフレドーニアの伝記には、「チマローザ自身チェンバロに座って57回の上演を行い、その後さらに183回も繰り返し上演された」(Manfredonia, 1813-25: vol.5(1818): pp.57-64)と報告するように、通常年間4作品が上演されることになっていた劇場シーズンは、本年ばかりはおそらく他の3作品の公演期間が短縮されることで、《秘密の結婚》の拡大・連続上演が行われることになったと考えられるかもしれない。

しかし、筆者が特定した支配人コレッタによる、あるオーケストラ団員への支払い記録の中に、1793年シーズンの1番目演目として上演された《秘密の結婚》の次に上演された第2オペラの給金に相当する年間第2期払い[11]が8月頭に終了するとの記述を見つけることにより、《秘密の結婚》の次に予定されていた第2オペラの上演もまた同時に8月初旬で終了していたことを導き出すことを可能とした。つまり、この記述は、4月頭から8月頭の4ヶ月の間に《秘密の結婚》を含む2作品が上演されたことを示唆し、おそらくは両作品とも2ヶ月ずつ、通常の公演日数の範囲内[12]で上演されていたのではないかというのが、現時点における史料から得られた結論である[13]。

2．ウィーン版からナポリ版への変更の背景と、その異同

ナポリ版でどのような変更が行われたのか、ワシントン国会図書館所蔵のウィーン初演版の台本と、ターラント市立図書館所蔵のナポリ初演第1版の台本の構造を比較すると、ウィーン版においては第1幕5場にあったフィダルマのアリア《家にいたのは本当よ *È vero che in casa*》が、ナポリ版では第2幕14場へと配置換えされているほか、ウィーン版の第2幕のフィナーレにおける、三重唱《恩知らずな伯爵、この成り上がり *Conte perfido, malnato*》と四重唱《なんと喜ばしい *Che trasporto d'allegrezza*》がナポリ版では削除され、その代わりとして、ナポリ版にはエリゼッタのために3曲の新しいアリアが挿入されていることが明らかとなった。

それらの3曲の差し替えアリアは、以下の通りである。

1) I幕3場：エリゼッタ《いつその時は来るのでしょう *Quando sarà il momento*》
2) I幕7場：エリゼッタ《喜びに心踊り *Agitata dal contento*》
3) II幕15場：エリゼッタ《別れか、あぁ愛するあなた *Nel lasciarti o sposo amato*》

なお、第1幕冒頭のアンサンブル《朝はなんと優しいのか *Quando è dolce in sul mattino*》については、ウィーン版の台本には見つからないが、楽譜は自筆譜として現存していることから[14]、ここではナポリ版における変更箇所として取り扱わないこととする。

3．ナポリ版《秘密の結婚》資料

i．特定された2種のナポリ版初演台本

さて、1793年のナポリ上演版の台本の現存例は、サルトーリによる台本集成(Sartori, 1990-97)からも、カルフォルニア大学バークレー校、ハーバード大学、そしてナポリ音楽院に所蔵される3点のものしかないことが一般的な見解となってきた。筆者は、このような中、新たにターラント市立図書館においても新たにナポリ版《秘密の結婚》台本が所蔵されていることを確認し[15]、計4種の比較を行った。

その結果、すべてどれも「1793年ナポリ版」とされていながらも、ナポリ音楽院の台本のみが出演者などの点で他の台本群と異なり、異版であることが明らかとなった。ここに計2種4点のナポリ版台本の現存が確認されることとなった。

ナポリ初演時（フィオレンティーニ劇場、1793 年 4 月～）における出演者一覧

パート名	第 1 ヴァージョン(1793) (i	第 2 ヴァージョン(1793?) (ii
Carolina (S)	Giovanna Codecasa	Carolina Danti
Elisetta (S)	N.N. (匿名- no name?)	N.N. (匿名- no name?)
Fidalma (Ms)	Luisa Negli	Rosa Martinelli
Paolino (T)	Antonio Benelli	Paolo Mandini
Robinson (B)	Giuseppe Trabalza	Filippo Senesi
Geronimo (B)	Luigi Marinelli	Fausto Borselli

i) ターラント市立図書館所蔵出版台本 *I-T* com: 6.898, vol.37/5
ii) ナポリ音楽院所蔵 *I-Nc*: Rari 9.3.9/10

結論を先に述べると、ターラント/カルフォルニア/ハーバード大学版が、ナポリ第1版、そしてナポリ音楽院版が、後に上演されたナポリ第2版とすることができた。

その理由を具体的に述べると、第1版のほうには、ナポリ上演についての経緯が支配人の前書きとして添えられ、3曲の挿入アリアの歌詞が含まれている一方、第2版には、上記の序文が認められないばかりか、挿入アリアのうちの一曲、I幕７場《喜びに心踊り *Agitata dal contento*》の歌詞が台本より削除され、一方で、幕間にバレエが新たに挿入されており、明らかに第1版の改定版であることが導き出されることによる。

筆者は、1793年シーズンのフィオレンティーニ劇場支配人コレッタの銀行支払い記録に、この第2版に出演したと考えられる歌手陣への支払いを全く見つけることはできなかった。通常この時代の歌手たちは、年間契約でもって一つの劇場に出演するため、それらの契約が見つからないとするならば、1793年シーズン中にフィオレンティーニ劇場に出演していたと考えることはできない。つまり、この〝第2版〟と考えられるナポリ音楽院台本は、ナポリ上演のために作成されたものであることは確かとしても、しかしそれはナポリ初演時のものではなく、「1793年」とされてきた年代についてはナポリ音楽院付属図書館によるカタログ化作業の際におきた誤述の可能性がある。実際、当該台本は表紙部分が欠損しており、後の手により題名、上演年が書き込まれていることからも、この可能性は高くなると考えられよう。ナポリ音楽院所蔵台本の実際の年代特定については今

後の課題としたい。

以降、本論文ではターラント所蔵の台本（ナポリ第1版）を「ナポリ版台本」として専ら扱うこととする。

ii. ナポリ音楽院所蔵の筆写譜群

次に筆者は、ナポリ版台本に合致する楽譜が、ナポリ関連の音楽資料の大部分を所有するナポリ音楽院付属図書館に所蔵されているものと考え、自筆譜を含む5つの同時代筆写譜[16]の調査を行った。その結果、どの楽譜もナポリ版台本とは一致しないばかりか、さらに挿入された3曲の差し替えアリアを特定するには至らなかった。また、楽曲のインチピットまで提供しているRISMオンラインにおける情報からも、差し替えアリアに該当する作品を明らかにすることはできなかった。

つまり、現段階で、ナポリ版の楽譜の現存の可能性は極めて低いと確認されるのである。

4．国立音楽大学にて新発見された《秘密の結婚》楽譜について

国立音楽大学に、数百点の筆写譜からなる一つの貴重書コレクションが存在していたことはこれまで全く知られてこなかったが、2004年度より同館司書の長谷川由美子氏が中心となりカタログ化が行われ、2005年春より一般にも公開される運びとなった。筆者は、まだ作業を進められていた最中であった長谷川氏から、コレクションの中に《秘密の結婚》の18世紀末から19世紀初頭に作られたスコアがあるとの報告をうけ、調査を行った。

結論から述べると、これがナポリ版第1ヴァージョンの台本に一致した（現時点において）世界唯一の現存楽譜であると確認することができた。この楽譜は用紙、筆跡から明らかに18世紀後半から19世紀初頭に作成されたものであるが、残念ながら完全なものではなく、1幕半分のみのスコアである。しかし、その中にナポリ版で挿入された3曲の差し替えアリアのうち2曲までが所収されており、さらに、楽譜に残る訂正、移調跡から実際の上演に使用された一次資料であると考えられる。

① I- 3：エリゼッタ《いつその時は来るのでしょう *Quando sarà il momento*》

形態: 23ページ
構成: Hr 2 in E♭, Cl 2, Fg 1, Vn 2, Vla 1, Bass
出典: 不明
同一資料: なし

第1幕第3場　エリゼッタのアリア《いつその時は来るのでしょう *Quando sarà il momento*》の楽曲は、変ホ長調、4分の3拍子のラルゲットと、8分の6のアンダンテ・グラツィオーゾの2部形式で、全102小節、23頁にわたって書かれている。楽器編成は　ホルン2部、クラリネット2部、ファゴット1部、弦4部と華やかなオーケストレーションである。なおこの楽譜下段には、半音高い、ヘ長調に移調されたバス譜が併せて記載されていることが確認できるが、これは18世紀を通して長らく使用されてきたおよそA=415の音高の楽器と、18世紀後半から使用が始まったとされる半音高いA=440の楽器群が、同時にこの演奏に参加していたことを表しているものと考えられよう。

なお、このアリアについては他の同一資料は見つからず、他の地域に広まった形跡を辿ることはできなかった。つまり現時点で、ナポリでの上演が唯一の演奏の場であったと考えることが妥当である。そして台本の序文にあるように、音楽そのものは「過去の作品からの引用」とされているため、筆者はチマローザによる1780年代以降、特にナポリ以外の場所で上演されたオペラ、ならびにカンタータの大部分を調査したが、未だ原曲を特定するに至っていない。可能性としては、すでに楽譜が消失している、1791年サンクトペテルブルグで書かれたセレナータ《予期せぬ夜会　*La serenata non preveduta*》、1792年ウィーンで上演されたカンタータ《心の磁力　*La Calamita dei cuori*》等から引用されたか、まだ総合的な調査がほぼ全く行われていない宗教作品などから引用されたのか、或いは〝コンサート・アリア〟として全く新たに書き下ろされたものではないかという仮説も考慮に入れる必要があるだろう。

第１幕３場歌詞
（場面設定：パオリーノがエリゼッタに伯爵との見合いの話を持ってくる）

Quando sarà il momento,	いつそのときは来るのでしょう、
Che all'idol del mio core	私の胸のうちの偶像は。
Il mio soave ardore,	私の甘い愛情は
Gli affetti spiegherò!	彼に私の気持ちを伝えることになるでしょう！
Che vezzi, che cose	この愛らしさ、かわいらしさ
Carine, e graziose	そして優雅さ
Si si gli farò.	そう、彼にすべてを見せるわ。
Ma il dolce contino,	だけど愛しの伯爵様
Il mio maritino	私の愛らしい夫は
Non giunge no no.	まだ着かないの。まだなのよ。
Deh amor mi consola.	ああ、愛が私を慰める
Deh corri, deh vola,	ああ、走ってきて頂戴！ああ、飛んできて頂戴！
Che senza il mio bene	愛しの人なく
Mai calma non ho.	私に安らぎなんてないわ。　筆者訳出

② I- 7：エリゼッタ　《喜びに心踊り *Agitata dal contento*》

形態: 37ページ
構成: Hr 2 in B♭, Cl 2, Solo Vn 2, Vn 2, Vla 1, Bass
出典:チマローザ《太陽の乙女 *La vergine del sole*》(1789, S. Petersburg) I-5 (No.6)《多くの苦しみのうちに心揺れ *Agitata in tante pene*》
同一資料:ローマ、アッカデーミア・サンタ・チェチーリア会図書館(***I-Rsc***. Accademico A-Ms 3130)

そしてもう一つの、第1幕7場に挿入されたエリゼッタのアリア《喜びに心踊り　*Agitata dal contento*》の構造は、変ロ長調、アレグロ・マエストーソ、4分の4拍子で、前拍を含め202小節、37頁に書かれている。全体は6節に分かれ、通常のアリアと比較して約2倍もの長さといえよう。全体の楽器編成は、ホルン2部、クラリネット2部、ソロ・ヴァイオリン2部、リピエーノ・ヴァイオリン２部、ヴィオラ１、バスという、大規模オーケストラであり、またこのような楽譜の物理的スペースのためか、先の曲のように移調されたバス譜は付加されていない。また注目されること

は、楽譜冒頭に〝2部オーケストラ〟と明記され、音楽も明らかに2部オーケストラの対応を念頭に書かれている点である。とりわけ、エリゼッタ、ソロ・ヴァイオリン、クラリネットのコンチェルタンテ風の扱いは極めてソリスティックなもので、1780年代後半の流行を表した管弦楽重視の傾向が見られる。

このアリアの歌詞はナポリ音楽院所蔵の〝ナポリ第2版〟台本において削除されており、つまり、〝第1版〟である1793年のナポリ初演の期間のみにしか演奏されていないことが判る。しかし、この音楽の華やかさゆえ人気を博したのか、後にアリアだけが独立して筆写されていることが判明した。

その写譜楽譜は、現在ローマのアッカデミア・サンタ・チェチーリア会図書館に、「*Agitata dal Contento*/ Aria/ A due Orchestre/ Del Sig. Domenico Cimarosa/ D.F.S.C."」(所蔵番号***I-Rsc.*** Accademico A-Ms 3130)として所蔵されており、筆者は現地にてそれを確認した。しかし、その楽譜タイトルにはインチピットだけが記され、これまで「出典不明」の筆写譜であるとされていたものであった。

このローマの筆写譜は、レチタティーヴォ部と、アリア部で紙のサイズが完全に異なり、それら二つが半ば強引に綴じられるという珍奇な形態であった。作成年代は紙、ならびにインクの様子からおそらく19世紀初頭であると考えられる。レチタティーヴォは横長の10段楽譜で、紙はむしろ18世紀の物の様子。一部に透かしがあり、その形は百合の紋章に丸。紙の形態は、縦横220×290mm。一方、アリア部は筆写譜でありながら、印刷された植物と花がモチーフになった額縁デザイン付の表紙が付けられ、明らかに19世紀に販売用として作られたものと考えられる。表紙に示されるD.F.S.C.が、おそらく出版社名と推測され、表紙を除いて16段譜、A4縦版に近い紙(縦横275×215mm）に、全38頁、202小節にわたって記入されている。

国立音楽大学所蔵の筆写譜と比較したところ、楽曲も、全体の楽曲の長さも完全に一致する同一のものであることが確認できた。しかし、国立版では「第1オーケストラ」、「第2オーケストラ」と文字で〝略記〟されていた部分が、ローマ版では二つのオーケストラの全パートが2段譜の形態で逐一書き込まれている点において異なっているほか、国立版に見られたいくつかの音符等の誤記がこの時点で訂正されている（とはいえこの筆写の段階で新たな誤りもまた引き起こされている）。

ここより、ローマ版楽譜は、初演用楽譜（おそらくこれが国立版楽譜に相当する）を基にして、より実用向けに作成された筆写譜であると推測され得る。

さらに、RISMオンラインにより、このアリアの出典も明らかとなった。その出典は、1789年チマローザがエカテリーナ女帝のために作曲した《太陽の乙女 *La vergine del sole*》(1789, S. Petersburg）における第1幕第5場のアリア、《多くの苦しみのうちに心揺れ *Agitata in tante pene*》である。

このアリアは、《喜びに心踊り *Agitata dal contento*》と全く同じ曲想を用いて作曲されていただけでなく、二つのオーケストラが配置される大規模な編成の点でも類似しており、一部歌のパートのアジリタにおける音域を変更する以外、原曲をほぼそのままチマローザは〝引用〟していたのであった。また、《*Agitata dal contento*》の中間部（第125-145小節）におかれた、《秘密の結婚》に繰り返し用いられている楽想も、原曲《*Agitata in tante pene*》において既に用いられている。ここよりチマローザは、《秘密の結婚》完成以前に既に、このモチーフを〝得意旋律〟としていたことが明らかとなった。

第１幕７場（場面設定：フィダルマとエリゼッタ、まだ見ぬ許婚との恋について語る）

Aggitata dal contento	喜びに心踊り、
L'alma in sen già si confonde,	胸のうちの魂はもう混乱している。
Ed amor par mi risponde	私には、愛がそれに共鳴しているように思えるわ。
Non dovrai più palpitar.	お前は、その時にアガっちゃだめよ。
Oggi avrò propizio il fato:	今日、願っていた運命がくるわ、
Che fatal momento aspetto:	私はなんと運命的な時を待っているのでしょう
Sol mi affanna il duro stato	私を悩ませるのは、
Di vederlo ancor tardar.	彼を見るのがまだ先になるというつらい状態だけ

筆者訳出

５．エリゼッタ役を創唱した歌手の特定 (17)

ナポリ版における大きな変更点となった挿入アリアの3曲は、すべてエリゼッタ役一人のために書かれていることからも、この役を創唱した歌手がナポリ公演時の目玉役者であったのであろうということが十分に推定される。実際、ナポリ第1版台本ばかりか、第2版台本の配役表においても、このエリゼッタ役は特別な枠飾りで装飾されており、特別な人物であったことが示唆されている。しかし、名前が記載されるべき部分に本名は記されず、N.N.（おそらくno name/no nomeの略記か？）とだけが印刷されて完全な匿名となっているのであった(18)。

i.　特定に関わる史料とその調査手法

この時代のナポリの民間劇場の記録は、国立公文書館等に全く残されていないため、このエリゼッタが誰によって創唱されたのか、その特定は全く不可能であろうと考えられてきた。そこで、私はこのフィオレンティーニ劇場の興行師の名前を特定することを手がかりに、彼の銀行取引記録を調査することにより、この名前を特定する試みを行った。

ナポリ銀行歴史文書館（Archivio Storico dell'Istituto Banco di Napoli- ASIBN）における調査方法については、既に筆者別稿(19)に詳しいため、ここでは簡単に触れるに留まるが、この文書館には1539年より1880年までのナポリの全ての銀行の全ての記録が残されており、これら膨大な資料からナポリ王国の大部分の経済活動を明らかにすることができる。ここで対象とする18世紀後半のナポリには7つの銀行が存在していたため、本調査はまず、それら7つの銀行のすべての顧客名簿を調査し、取引銀行の特定から始まる。その後、顧客名簿に記されている口座番号を基に、今度は基本台帳を参照し、口座の動きを確認した

後、最終的に銀行から受取人へと支払いがなされた毎営業日ごとに作成される営業日誌を参照し、詳細な記録を解読していく。

この作業において最初に必要となるのは、支払人となる劇場支配人の名前の特定であるが、この特定の時点で既に長い期間の調査が必要であった。それは、1780年以降になると、もはや興行師はその自分の名前を台本に載せることはなく、経営に関わる一次資料を参照する以外、誰によって経営されているのか分からないという事情がある(山田, 2002)。筆者は同文書館での作業中における偶然の発見により、1793年期におけるフィオレンティーニ劇場の興行師をジュゼッペ・コレッタであると特定し(山田, 2005 a)、その身分の特定を行った。彼は、1784年よりフィオレンティーニ劇場支配人として登場し、その後1789年より王立フォンド劇場、ならびに179 1 年より宮廷劇場サン・カルロ劇場支配人としても興行活動を行った〝半公的〟な性格をもつ興行師であった[20]。

ここで注目すべき点は、この両劇場において興行を行っていたコレッタは、王立劇場においては常にその名前を明らかにして活動していたのに対し、フィオレンティーニ劇場での興行の際にその名前を公開することは決してなく、常に覆面で経営を行っていたことである。

ii. 歌手の名前と、賃金の特定

《秘密の結婚》の興行を行った人物を、以上のようにジュゼッペ・コレッタであると特定することを手がかりに、筆者は彼のメイン・バンクがサン・ジャコモ銀行であったことを明らかにした。彼は同時期に3つの劇場の経営を行っていただけあり、サン・ジャコモ銀行史料に発見された彼の口座には、年間1000件近い取引が記されている。筆者は、これらを逐一紐解き、本年彼と契約をしていた他のすべての出演歌手を特定することで、匿名となっていたエリゼッタ役歌手の特定を可能とした。そして、これがテレサ・ベルティナーティとされる歌手であった[21]。

彼女は、1788年よりナポリの民間劇場の〝セリア〟歌手としてキャリアを開始したのち、1793年の《秘密の結婚》での出演以降、北イタリアへ移ると、そこで少なくとも1800年まで一貫してオペラ･セリアのみに出演する正真正銘の〝宮廷ヴィルトゥオーザ〟として活躍する、喜劇オペラとオペラ･セリアのジャンル間の垣根を越えることができた人物であった(Sartori, 1990-97)。

支払い記録を読解していくと、このベルティナーティは年間4作品のオペラ出演において1400ドゥカーティという俸給を得ていることが明らかとなった。調査によると、彼女はコレッタと契約していた他の出演者の中でもっとも高い俸給を得ていた、まさに〝プリマ・ドンナ〟である。しかし、彼女だけが例外的に高賃金であった訳ではなく、他の出演者の賃金もおしなべて年俸1000ドゥカーティを越え、その賃金の平均水準は、1770年代のナポリの民間劇場の歌手のものと比べ、もはや7倍近くも上昇し、既に宮廷劇場の歌手の給与水準(DelDonna, 2001) と比肩するものとなっていたことが明らかとなる。つまり、経済面で見れば、1770年より90年の間に、ナポリの民間劇場はもはや〝民間〟を装った宮廷劇場としての機能をはじめていたことが証明できたのである。

なお、オーケストラの賃金は、1770年代から90年代にかけてその水準にほぼ変化はなく、リピエーノ奏者の場合で年間平均30ドゥカーティであった。ここに、器楽奏者の地位に変化はなかったことが確認できたばかりか、さらに、この歌手賃金の上昇はインフレによって引き起こされたものではないことが確かめられる。

このような史料調査により、1770年代より90年代にかけての、ジャンルとしての「喜劇オペラ」の地位の向上が、当時の社会の評価の一つである賃金という観点からも裏付けられることとなり、ここに作品分析を基本とするジャンルとしての潮流の変化(山田, 2004) は、実証されることとなった。

6．結び、およびニューズレター版について

本論は、国立音楽大学コレクションに見つかった《秘密の結婚》スコアを、世界唯一の1793年〝ナポリ版〟楽譜であると特定することに始まり、その楽譜が用いられたナポリでの上演をめぐる種々の問題――上演日程、第2版ナポリ版台本の存在、さらには、差し替えアリアを創唱した出演歌手の特定と、その賃金水準――を明らかにするものであった。

2005年5月14日、国立音楽大学において開催されたIAML第38回例会における発表において、筆者はまだその時点で劇場経営面に関わる史料調査を完了していなかったこともあり、フロアの皆様から多くの疑問、ならびに〝今後の成果〟を期待する声を頂戴した。ここに、2005年5月より9月まで現地において行った史料調査により明らかとなった新発見の見解を加え訂正を施し、第2版〝新ヴァージョン〟原稿とすることで、発表報告に代えさせて頂くこととする。なお、この変更後〝新ヴァージョン〟は、2005年10月21日、イタリア音楽学会第12回全国大会（於国立ペーザロ音楽院）において発表された（山田, 2005 d）。

また、字数の都合上扱えなかった詳細なデータを加えた〝フル・バージョン〟論文、ならびに筆者が新たに作成した2曲のアリアの校訂楽譜は、日本ロッシーニ協会紀要《ロッシニアーナ》の2005年度号（2005年12月発行予定）に掲載予定となっていることを付記したい。

注

1) 本作品の最初の出版は、1799年フランス、アンボーImbault社による総譜であり、その後1800年から1991年までの出版楽譜は少なくとも40種にのぼっている。詳細な情報については、パーソンズのカタログ(Persons, 1986: vol.21 A, pp.222-225)、ならびにジョンソンによる作品情報(Johnson, 1972: pp.459-495) を参照のこと。

2) 2月7日の初演には、レオポルト2世はプロシアとフランスの共和国制に共同対抗する同盟を結んでいたため、出席ができなかったのであろうと推測されている (Iovino, 1992: p.150)。

3)全曲がアンコールされた唯一のオペラとして、ギネスブックに掲載されている。
4) 1618年建築のナポリ最古の民間劇場。1709年からは喜劇オペラの専門上演施設となる。
5) 1724年10月15日開場の喜劇専門劇場。5層，各層13桟敷、1000人の観客を収容したといわれる。
6) Johnson, 1972: p.66. ヌォーヴォ劇場第2オペラとして上演。
7) 本論第5章を参照のこと。
8) 史料Archivio Storico dell'Istituto Banco di Napoli(以下ASIBNと略記), Banco San Giacomo, giornale copiapolizze, matricola 2802, 5/VI/1793, (p.504).
9) ナポリ版第1版出版台本（所蔵: ***I***-*Tc*, 6.898, vol. 37-5) p.3.
10) Aversa a Domenico Cimarosa, 1901: p.123./ Bonaventura, 1915: p.49 (ただし5ヶ月以内にとは述べていない)/ Apicella, 1995: p.20/ Johnson, 1972: p.65 (ただし、5ヶ月以内にとは述べていない) 他
11) 楽団員は通常、年間4作品のオペラ作品の上演期間ごと、年間4回の分割払いで報酬を受けていた。
12) 通常の公演日数は1月半から3ヶ月以内の期間であった。*Cfr.* 山田, 2005 b.
13) 史料ASIBN, Banco San Giacomo, giornale copiapolizze, matricola 2808, 11/VII/1793, (p.637).
14) ナポリ音楽院所蔵自筆譜(***I***-*Nc*, Rari 1.5.16-17)において、この三重唱は、序曲、アリアなど他の部分と同じ筆跡で書かれ、他の部分とあわせて綴じられている。
15) 同図書館には、約300作品以上のナポリの喜劇オペラの台本から成るコレクションが存在する。
16) 1) ***I***-*Nc*, Rari 1.5.16-17(ウィーン版自筆譜)
2) ***I***-*Nc*, Rari Cornice 1.5 (ウィーン版に同じ)
3) ***I***-*Nc*, 25. 3.18-19(表紙にナポリ版の可能性を示唆するも、収録曲、構造はウィーン初演版と同一)
4) ***I***-*Nc*, 25.3.20-21(表紙にナポリ版の可能性を示唆し、実際に、一人の新たな登場人物[バス: Colafabio]が加えられるも、ナポリ版差し替えアリアは含まれない)
5) ***I***-*Nc*, 6.4.23-24(第1幕はウィーン版、第2幕は、ナポリ版に近い構成であるが、当該の挿入アリアは含まれず)
17) 筆者は2005年5月末から9月にかけて、文部科学省科学研究費（特別研究員奨励費）を得て現地調査を行い、以上の成果を挙げることが可能となった。
18) 歌手が公演直前まで決まらなかったためか、或いは、王室、或いは貴族などとの関係から〝民間〟劇場に出演することがはばかられたのか、その理由については《ロッシニアーナ》所収のフル・バージョン論文において論じることとする。
19) 山田, 2005 a; 2005 b; 2005 c.
20) 筆者別稿 (山田2005 a: p.12) に作成したコレッタのキャリア表を参照のこと。
21) 史料ASIBN, Banco San Giacomo, giornale copiapolizze, matricola 2804, 26/IV/1793, fol.248v-249r.

文献表

AA.VV.
1901 *Aversa a Domenico Cimarosa; Nel primo centenario della sua morte.* Napoli: Francesco.Giannini& Figli.
APICELLA, GIUSEPPINA
1995 *Domenico Cimarosa, l'uomo e l'artista; nel 200 Anniversario del* "Matrimonio Segreto". Aversa: Associazione Nazionale Scuola Italiana
BONAVENTURA, ARNALDO
1915 *Domenico Cimarosa*. Torino: La Riforma Musicale.
COTTICELLI, FRANCESCO
2005 "I segreti del matrimonio tra Vienna e Napoli", in PAOLOGIOVANNI MAIONE E MARTA COLUMBRO (ed.) *Domenico Cimarosa, Un napoletano in Europa*; Atti del convegno Internazionale di Aversa, 25-27 Ott 2001. Lucca: Libreria Musicale Italiana, vol.1, pp.293-304.
DELDONNA, ANTHONY
2001 "Behind the Scenes: The Musical Life and Organizational Structure of the San Carlo Opera Orchestra in late-18th century Naples" in PAOLOGIOVANNI MAIONE (ed.), *Fonti d'archivio per la storia della musica e dello spettacolo a Napoli tra XVI e VIII secolo*. Napoli: Editoriale Scientifica, pp.427-448.
DELLA CORTE, ANDREA
1936 "Domenico Cimarosa", in Conferenza tenuta ad Aversa in occasione della celebrazione campani, Istituto d'Arte pel il Libro in Urbino, pp.71-102.
DI DATO, GIULIA, TERESA MAUTONE, MARIA MELCHIONNE, CARMELINA PETRARCA, PAOLOGIOVANNI MAIONE
2005 "Notizie dallo Spirito Santo: La vita musicale a Napoli nelle carte bancarie (1776-1785)", in PAOLOGIOVANNI MAIONE E MARTA COLUMBRO (ed.) *Domenico Cimarosa, Un napoletano in Europa*; Atti del convegno Internazionale di Aversa, 25-27 Ott 2001. Lucca: Libreria Musicale Italiana, vol.2, pp.665-1198.
DEGRADA, FRANCESCO
1979 "Dal Marriage à la mode al Matrimonio segreto: genesi di un tema drammatico nel Settecento (1975)", in *Il Palazzo incantato; Studi sulla tradizione del melodrama dal Barocco al Romanticismo*. Fiesole: Discanto Edizioni, vol.2, pp.19-41.
DONATONI, FRANCESCO
1976 *Il Matrimonio segreto di D. Cimarosa (originale italiano di G. Bertati) Dramma giocoso in 2 atti. Revisione secondo i testi originali di F. Donatoni*. Milano: Ricordi.
IOVINO, ROBERTO
1992 *Domenico Cimarosa; Operista napoletano.* Milano: Camunia.
JOHNSON, JENNIFER E.
1972 *Domenico Cimarosa.* (Ph.D diss.) University College, Cardiff.
MAIONE, PAOLOGIOVANNI
2003 "Matrimonio segreto: un modello 'classico'

per la scena europea", in Concert Program, *Il Matrimonio segreto* (dir. Ottavio Dantone, orc. Teatro Massimo). Palermo: Teatro Massimo, 16-23 Nov. 2003. pp.9-23.

MAIONE, PAOLOGIOVANNI, MARTA COLUMBRO (ed.)
2005 *Domenico Cimarosa un "napoletano" in Europa*, in 2 vols. Lucca: Libreria Musicale Italiana.

MANFREDONIA, GENNARO TERRACINA DA
1818 "Cimarosa" (27/June, 1818), in *Biografia degli uomini illustri del regno di Napoli, ornate de loro rispettivi ritoratti compilata da diversi letterati nazionali*. vol. 5. Napoli: Nicola Gervasi, 1813-25. vol. 5: pp.57-64.

MOOSER, R.ALOYS
1949 "Le séjour de Cimarosa en Russie", in AA.VV. (ed. Comitato Nazionale per le celebrazioni), *Domenico Cimarosa; Per il bicentenario della nascita*. Aversa, 1949.
1951 *Annals de la Musique et des Musiciens en Russie au XVIIIme siècle*. Genève: Edition Mont-Blanc.

PERSONS, CHARLES H.
1986 *The Mellen Opera Reference Index: Printed Opera Scores in American Libraries*. Vol.21 A (1998), pp.222-225.

SARTORI, CLAUDIO
1990-97 *I Libretti italiani a stampa dalle origini al 1800*, in 7 vols. Cuneo: Bertola & Locatelli Editori.

山田高誌
1999 「ドメーニコ・チマローザ(1749-1801); その生涯と作品についての文献的研究」早稲田大学, 1998年度卒業論文, 145p.+XXIIp.
2001 18世紀ナポリの喜劇的オペラの呼称について」日本ロッシーニ協会紀要《ロッシニアーナ》vol.21(2001), pp.17-23.
2002 「変容するナポリの喜劇的オペラ; 18世紀中期のレパートリと，台本における〝笑い〟から」大阪大学大学院, 2001年度修士論文, 161p.
2004 「町から宮廷へ、娯楽から作品へ; 1760年代から70年代のナポリの喜劇オペラの社会的地位の変化と、台本における「笑い」の重心の変化」早稲田大学21世紀COEプログラム「演 劇の総合的研究と演劇学の確立」《演劇研究センター紀要》vol.4 (2004), pp.57-69.
2005 a 「1770-90年期に見られる、ナポリの民間劇場の〝宮廷娯楽化〟への道程; ナポリ銀行歴史文書館（ASIBN）史料に基づくパースペクティヴ」《阪大音楽学報》vol.3 (2004), pp.1-21.
2005 b 「1770年のナポリ・ヌォーヴォ劇場の興行形態; パイジェッロ《恋のたくらみ》の上演から」《地中海学研究》vol.28(2005), pp.57-80. (イタリア音楽学会SIdM第11回全国大会、2004年10月23日、レッチェ大学においても同内容を発表.)
2005 c "L'Attività e la strategia di Gennaro Blanchi, impresario dei teatri napoletani nella seconda metà del Settecento. Interpretazione del suo sistema di gestione dalle scritture dell'Archivio Storico dell'Istituto Banco di Napoli-Fondazione",《Quaderni dell'Archivio Storico》(Istituto Banco di Napoli-Fondazione), vol. 2004 (pub.2005), pp.95-116.
2005 d [学会発表] "La versione napoletana de Il Matrimonio segreto di Cimarosa (1793, Teatro dei Fiorentini): su due arie sostitutive nella partitura ritrovata nella collezione del Kunitachi Music College di Tokyo", XII Convegno Annuale della Societa Italiana di Musicologia (イタリア音楽学会SIdM第12回全国大会), 2005年10月21日、ペーザロ音楽院.

IAML 10-15 July 2005 in Warsaw 報告

荒川恒子（支部長）

支部長に就任して３度目の国際大会への出席である。タリン、オスロに次いでいずれも私にとっては未知の国、おまけにポーランドは音楽の上で非常に関心を持っていた国なので、何としても参加したいところであった。

ポーランドは多くの音楽家にとってはショパン誕生の地として身近な国であろう。事実会議での発表にもショパンの楽譜や記録、16世紀にまでさかのぼり、ショパンのマズルカやポロネーズへいたる「ポーランド舞曲」についてといった内容は目立つ。しかしバロック音楽を研究分野とする筆者にとっては、ポーランドはザクセン選帝侯フリードリヒ・アウグスト1世が、1694年になりふりかまわずプロテスタントからカトリックに改宗して手にいれた土地、そしてアウグスト2世王として君臨し、J.J.クヴァンツをはじめとする優秀な奏者で結成した楽団を率いて滞在した土地として興味があった。また最近はヨハン・ゲオルク2世統治下(在位1656-1680)のドレスデン宮廷音楽を研究しているので、この国は一層身近な国になりつつあった。ポーランドの大都会といえばまず11世紀から16世紀まで首都であったクラクフである。クラクフ宮廷の楽団では1595-1598年にイタリアの大作曲家L.マレンツィオが楽長を務め、その際22名のイタリア人音楽家が同行したことが判明している。クラクフのヴァヴェル城が1596年に火災にあったのを契機にワルシャワに宮廷が移ってからは、王ジクムント3世は成功しなかったものの、Cl.モンテヴェルディの招聘に尽力した。また1628年にはワルシャワ宮廷で《アチスAcis》(作曲家不詳、ポーランド語による台本が現存）が演奏されているが、これはイタリア以北で演奏された最初のイタリア・オペラである。さらに北の大都会ダンツィヒ（クダンスク）の聖マリア教会で楽長を勤めたのはK. フェルスター父、その子

のカスパルはワルシャワでM.スカッキに師事した後ローマのイエズス会でG.カリッシミのもと研鑽を積み、帰国後ワルシャワ宮廷に仕えている。以上ほんのわずかの例を挙げてみても、バロック時代初頭における、ポーランドとローマの非常に強い結びつきを見て取ることができる。トルコの脅威、プロテスタント諸国との対立から身を守るために、ローマは東ヨーロッパ最大のカトリック国ポーランドと良好な関係を保つ必要があり、「教皇庁と枢機卿の命令」で、ポーランドの好みにあったイタリア音楽を輸出したのである。そしてポーランドを経由したイタリア音楽がまた、ドイツの中東部に位置するドレスデンに流れてくるのである。そのような距離感を体験してみたい、という個人的な思いがあった。

それはまず12日にワルシャワの王宮で開催されたアンサンブル Il Tempoの奏する初期バロック音楽の演奏会で充たされた。同アンサンブルは、ポーランドの図書館に現存する作品を演奏した。私達にもなじみのイタリアの作曲家と並んで、A.ヤジェンプスキ(1649没)、M.ジェレンスキ(16/17世紀)、M.ミェチェフスキ(1651没)、S.シャジンスキ(17世紀後半)、M.ヴェロノヴィチ(17世紀後半)といったポーランドの作曲家の作品を聴いた。当然のことながらポーランド生まれの音楽家は存在したのである。彼らのことを考えもせず、音楽も聞いたこともなかったのでびっくりした。同様のことは今回の大会中しばしば経験した。すなわち国境を越えて伝えられ、世界的に関心を集めている音楽家とお国の方々の良く知り好む音楽の間にはギャップがあるし、現地に行かないと、それに気付く機会も失してしまうことが多くあるということである。

13日の午後は遠足であったが、私はワルシャワ市内見物を選択した。戦後の崩壊から立ち上がり整備された広々とした道路、緑深い大きな街中の公園、王の離宮等のんびりとした散歩の後、離宮のオランジュリで私達を待っていてくれたのは、中世からバロック初期までを専門とするアンサンブル Ars Novaであった。またもや戦禍をくぐって残存したポーランドの中世音楽を聴くことができた。その他歴代のポーランド王が音楽ばかりでなく、美術品や調度品にも見せる趣味の良さは随所に認めることができた。案内の方のコメントにもヨーロッパ各地から、最良の品を選択して購入した旨の説明がなされた。

このように長い、積極的な音楽の歴史をもっている国だからこそ、当地の楽譜コレクションを見たい、という気持ちは自然に湧いてくる。その期待をわずかに充たしてくれたのは会議後のクラクフ旅行であった。1364年創設でコペルニクスやヨハネ・パウロ2世が学んだヤギェウォ大学図書館の展示に、Cl.モンテヴェルディ《オルフェオ》初版(1609)を見出した筆者は、ふとそれがいつから同図書館所有なのか尋ねてしまった。出版当時に購入あるいは贈呈されたのでは、と興味津々だったからである。どうもまずい質問であったらしい。近くにいたドイツの図書館員と所有権に関して、些細なしかし多少神経をとがらす会話になってしまった。全体として友人達のもてなしに心を配ってくれたポーランドの方々の、置かれた難しい立場にはっとした瞬間であった。

自身が図書館の実務に携わっていないということもあり、支部長としての立場をわきまえないコメントになってしまうのは、申し訳ないような、また多少なさけない気持ちではある。どうしてもコンサートや見学にチェックをいれるのが先になってしまうのである。しかし会議への参加の仕方に関しても、少しずつ様子がわかってきた。

音楽史を学ぶ者の関心は、中世から今日に到るまでの豊かなポーランドの音楽資料の状況を知りたい一言に尽きる。実際絶えず戦禍に見舞われたポーランドはその度に立ち上がり、戦後乏しい財政の中で着実に文化遺産の整理に着手している。ワルシャワからクラクフへの車中から見た景色、またEU加盟を決定しながら通貨の変更がまだなされない現実、ワルシャワ郊外に大きく広がる高層団地、地下に張り巡らされた小商店街等は、彼らのぎりぎりの、しかし未来を見据えた生活を物語っているようである。

そのような中で、ワルシャワ大学図書館音楽部門は、1952年から主としてポーランドの現代作曲家や手書き譜、ソフィア・リッサのような音楽学者の記録、下書き等の収集を行っている。

南部の工業都市カトヴィチェにあるシマノフスキ音楽院では、15世紀にまで遡り、今日に到るシレジア音楽文化を、収集、整理し研究する組織を1968年より立ち上げている。

ショパンの自筆譜があまりないことをFr.リストは嘆いていたが、幸いなことにそれが誤りであり、自筆譜、手紙、思い出の品々、肖像画等は世界中に分散されてはいるが多く存在すること、その中でもポーランドは自筆譜と手紙を多く所有し、1999年6月11日にヴィーンで開催されたユネスコ会議で、ワルシャワ国立図書館とショパン協会の所有になるそれらがユネスコの世界遺産に登録された。

ポーランドの誇るピアニスト、作曲家、政治家I.J.パデレフスキの収集した書物、楽譜、彼自身に関わる手紙、写真、演奏会のプログラム、録音等が遺言によりクラクフのヤギェヴォ大学図書館所有となり、1974年にパデレフスキ・ドキュメンテーション・センターが創設された。

ワルシャワ国立図書館所有の約7,000にのぼる貴重なポーランド演奏家のレコード・コレクション、特にパデレフスキが1906年2月27日にピアノ・ロールのために行った録音が残っている。さらに同コレクションに含まれるポーランド以外の国に住む末裔あるいは外国に住むポーランド人（彼らはポロニアと総称される）の演奏録音の存在。

ポーランドの音楽出版社 PWMの1945-2005年までの歴史、すなわち共産国時代における独占的な立場から、1989年以後西ヨーロッパ・タイプの企業に変換を迫られている様子。

中央ヨーロッパに位置し、多くの政治的変遷を経てきた国の音楽史の溝を埋めていくための、近隣国に散逸されている資料の探求や研究の必要性。事実1939年以前に作成されたカタログと、戦後の図書館に現存している内容にはギャップがある。それを埋めるためにワルシャワ、レグニツァ（南西部の市）、エルブロンク（北東部の市）のコレクションに関する情報を近隣の国々に問い合わせている。逆にワルシャワ国立図書館所蔵の古ロシア典礼音楽の手書き譜の重要性を認識して、1998年にモスクワとワルシャワ間で研究プロジェクトが発足した。18世紀から19世紀初頭に活躍したM.オギンスキ(1765-1833)の作品が、当時ロシアで好んで出版され、現在モスクワの国立図書館に所蔵されている。長い音楽の歴史を持つポーランド、20世紀になって共産国、連帯組織への転換、そしてEU加盟国への道を選択したポーランドは、度重なる国土の荒廃の間に失った貴重な遺産を、再構築するために地道な努力を重ねているように感じられる。

以上普通の音楽関係者にしてみればポーランドに行かなければ、ほとんど関心ももたないし知りえない多くの情報を得ることができた。ただ筆者が首を傾げたことは、現代における世界的な音楽家といえば、K.ペンデレツキと考えていたのであるが、発表でも演奏会でも彼に関しては、全くといって言及されなかった。

市中心部にある大きなデパートのようなところに、本やCDの売り場がある。そこに勤める若者が非常に深い音楽知識の持ち主と聞いて、掘り出し物を探しにいった。さっそくお勧めのCDをお願いした。当地で人気のある音楽家といえばパデレフスキ、K.シマノフスキそしてM.モシュコフスキ等の器楽曲なのだ。また素晴らしい歌姫によるポーランド歌曲集を選んでいただいた。「古楽」は如何と問われ、待っていましたとばかりにお願いしたら、ポーランドの受難曲、中世、ルネサンス、バロックの音楽がたちどころに並んだ。いずれも好演で、専門職を心得た青年のアドヴァイスの良さに感じ入った瞬間である。それにしてもチェンバロ復活の立役者（今となっては異論もあろうが）、ワンダ・ランドフスカに関しては、やはり会議中、どこにも何の話題もなかったが、ポーランドでは彼女のことはどのように捉えられているのだろう。ちょっと気になる点であった。

さて筆者に課されているのは支部活動に関する報告である。今回は月曜日の16:15−17:45という時間をとって、参加者全体に報告するという形で行われた。私は会員数の変遷、役員選挙の結果の発表、総会、例会および親睦会の開催、ニューズレターの発行等について説明をした。さらに多少風呂敷を広げた感はぬぐえないが、RISMプロジェクトの設立にむけて努力していること、ホームページに英語版を加えるべく検討していることを説明した。また昨年度報告したバッハの結婚カンタータ BWV216 の楽譜が出版され、それを使用して演奏会がひらかれたこと、さらには会議以後報告をうけた会員田村史氏の活動、すなわち生活様式の変化と共に消滅の危機に瀕しているインドネシアの口承文化の記録のために、氏が現地の方々へなしている援助と協力に関して、本部事務局にお伝えした。

いずれの支部の報告もあまり変わりばえはしない。しかし今後支部報告をどのようにすべきか、が議論され始めている。すなわちペーパーですませられる部分はそのようにし、会議に集まって議論すべきことに関してはそれらを抽出し、語り合うべきではないかということである。ということになるとIAMLのメンバーであることをどのように受け止め、支部としてどのように活動するかが問題となる。

まず日本支部はメンバーからみれば、かなり大きな支部である。しかし現在活動しているプロジェクトはRILMのみである。本部に置かれている様々な「分科会」と関わる活動は全くといってよいほど作動していない、といわざるを得ない。わずかに藤堂氏が現役の図書館員であられた時に、「教育機関における図書館」分科会の副座長として活動され、コピーライト委員会と深い関わりを持っていらした。しかしそれらの氏の活動がIAML日本支部の活動と関わりを持っていたわけではない。むしろ個人としての活動である。勿論国際会議での活動は、支部から委員を選出するのではなく、個人的な関心からなされることは言をまたない。しかし他支部の活動振りが、大なり小なり図書館員を中心としながら、本部の「分科会」「委員会」「プロジェクト」等と関わりを持っていることを知る時、日本支部としての活動の仕方を模索すべき時がきているのではないか、考えさせられている。特に今年は3年連続で出席しているということもあり、多少顔を覚えてくださった方から、当然のこととして図書館の様子について質問を受けることが多かった。IAMLはやはり図書館の実務に携わる方が、そこで体験なさる様々な問題を、音楽学者等と協力しつつ模索していく場であり、その逆であってはならないのではないか、今感じていることである。

会議に前後して支部には「パブリック・ライブラリ分科会」から質問やお願いが届いている。事務局からいわゆる公共図書館にお勤めのメンバー4人とひとつの機関に御協力いただいて、回答を送っておいた。その際役員会では、わが国のパブリック・ライブラリと音楽との関わりを多少議論した。今年多くの「分科会」座長以下のメンバーが交代した。「パブリック・ライブラリ分科会」の新座長はアムステルダム公共図書館に勤務し、オランダ支部長も務めるH.クイパー(Kuiper)氏である。彼の談によれば、今回のワルシャワ大会の参加者中、公共図書館勤務者は14%にすぎない、とのことである。しかし日本支部から見れば、14%もいて、おまけに開催会場はワルシャワ国立図書館という公共図書館なのである。なんというらやましさ。昨今日本の小さい町や村の公共図書館が元気だと聞く。日本語で読める音楽図書やCD、DVDなども充実してきているらしい。せめて日本支部の中で、各部署でがんばっている仲間とコンタクトを取り合うような努力もしてみたいものである。多くの苦難を乗り越えて生き続け、そ

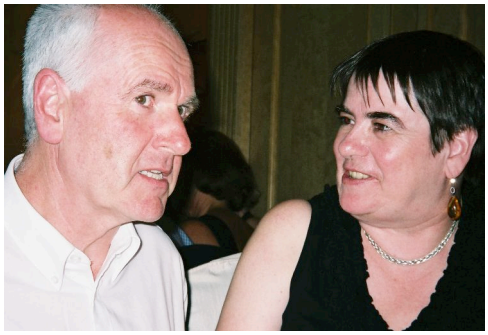
れだからこそ心温まる多くの音楽のプレゼントをしてくださったポーランドの人達から得た、私の想いである。

IAML 2005 WARSAW

藤堂雍子（副支部長）

初日 **7月10日（日）**、滞在ホテルのある中心街から南に路面電車で５つ目の停留所、緑色の全面パネルが目印の国立図書館が公園を背景にあり会議場となっている。最初のカウンシル・ミーティングへ。

①この1年の間に亡くなったL. コーラスら会員への哀悼の辞を含め会長挨拶
②事務長によるレジュメ
③会計から会費値上げの提示(機関ER57、個人ER32へ)
④規約委員会から総会・カウンシル・クロージングセッションの組み立て方、時間、開催頻度についての審議の経緯説明、毎年総会開催案が多数派であることを確認したが、来年再提案を約束
⑤電子掲示板に要約agenda付設の提案があり、8月から9月までにソフトを変更するので試作を約束、現登録者は600との報告あり
⑥ホームページ新WebmasterG.ガンバが初参加し紹介された。HP はアップル使用とのこと
⑦関係機関の近況報告では、IFLA オスロ会議でUNI-MARC21 の予備版、著作権問題も審議対象となることなどが音楽分野にとっても重要で注目されること
⑧IMC(日本は脱会を決めたが）は10月にロスアンジェルスで総会開催予定
⑨2006年会議では併行して開かれるIMSと3つの合同セッションを準備中であること
⑩著作権委員会はアンケートに未回答の各国支部に回答要請
⑪各委員会、部会の今期改選についての事務連絡などが話された。



事務長Roger Flury（ニュージーランド国立図書館）とAnne Lelay（音楽教育機関図書館部会座長）

11日(月) インフォメーション・セッションは、所謂ヘッドライン情報で、スイスRISM（http://www.rism-ch.ch)DB公開(http://www.rism-database.ch/ 詳細は日本支部HP長谷川事務長のコメントも参照)、RISM会長Ch.ウォルフ(ハーバード大）も初登壇、著作権委員会から1995年以降の活動報告とアンケート協力が促され、モスクワ音楽院から国際音楽アーカイヴ構想について、スロベニアの首都リュブリャーナの国立図書館と大学図書館共有 DB、英国図書館録音資料部のArchival Sound Recordings Projectによる(http://www.bl.uk/collections/sound-archive/archsoundrec.html)のHP紹介などが満載された。

「ポーランドのアーカイヴ」（アーカイヴとドキュメンテーション・センター部会）は、まず1952年に音楽学部に設置された「ワルシャワ大学図書館ポーランド作曲家アーカイヴ」について、20世紀作曲家の楽譜を含むドキュメント資料(書簡、草稿ほか K.シマノフスキ、L.ルジツキ、T.ベイルド、G.バツェヴィチら作曲家）と音楽学者のドキュメント資料（Z.リサ、J.ショミンスキら）を収集している。K.ペンデレッキ、W.ルトスラフスキ、H.M.グレツキら大作曲家の自筆譜も所蔵。

「シレジア地方の音楽文化」は、ポーランド南西部オデル河の上・中流域を指し、都市カトヴィッツェにあるシマノフスキ国立音楽アカデミーに、1968年に設立されたアーカイヴで、15世紀のオルガン・タブラチュアに既にその特異性が見られ、シマノフスキの音楽にも反映されている。このアーカイヴ設立は当アカデミーの主任司書でもあったK.Musiolが中心となった。

「創作の歴史：オンライン・ショパン諸版（OCVE）」は、ロンドン大学ローヤル・ホロウェイ・カレッジのJ.リンクによって紹介されたパイロット・プロジェクトで、ショパンの作品草稿から清書にいたる自筆、初版から主要出版楽譜各般の比較を可能とするOnline Variorum Editionの試みである。マニュスクリプトや初版などが個人蔵や複数の図書館に跨っていて、それが唯一の存在である場合、資料比較は容易ではない。この方法は研究者にとって画期的で、豊かな財団や電子技術を駆使できる環境が必須（http://www.kcl.ac.uk/humanities/cch/ocve/final/content/)。権利処理も時間のかかる仕事であり、2003年以降国際的なワークショップを重ねているプロジェクトでもある。サンプル版も見ることができたが、これは上記HPにはまだアップされていない。収録対象はメンバーであるCh.グラボフスキの著作(注1)が中心となっている。

「著作権とクリティカル・エディション」（著作権委員会）はパネル・ディスカッションの形を取り、ヴェルディ及びロッシーニ全集校訂版を出しているシカゴ大のPh.ゴセット、ポーランド楽譜出版者PWMの主幹編集者であるA.コソフスキ、そしてケルン放送局オーケストラ・ライブラリアンのJ.ランブレヒト、J.リンク（前出）らが校訂版やその演奏用楽譜を中心に著作権解釈を展開した。M.-R.ド・ラランドの校訂者L.ソーキンスとハイペ

リオン・レコード社による校訂者の創造的行為を巡っての係争(2005年5月判決はハイペリオンが敗訴）を意識したと思われる。他方、ヨーロッパのラテン系の音楽学校では、音楽学校の学生が全集校訂版を使って勉強することの大切さは当然だが、高価で図書館でさえ複数備えることなどできない。そうした場合、教育用に複写できる仕組みとして、個別に出版者との複写協約が有効となっているのだが、これは英米国のようにFair Useの概念が法令化されていないことにもよる。互換性のない各国著作権法の下で、ほとんど国境のない「音楽」のような待ったなしの演奏芸術の世界では、オリジナリティとその再現あるいは複製の問題は、実態が複雑で国際的な標準法規化、実用ガイド化が難しいジャンルでもある。そうした現実を踏まえたEUディレクティヴへのアッピールも欠かせない。

この日最後の各国支部報告はベルギーが著作権対策機関を音楽学校で立ち上げたこと、デンマークが支部ホームページ英語版作成、フランスはHPを12月を目途に改訂準備中、ペリグー大会の記念誌発行、1日セミナーの開催など、ドイツは、ライプツィヒの音楽遺産が市場に出たことについて文化相宛にIAMLより書簡が出されたこと、各地で公共図書館45周年記念を祝し、イタリアはナポリで2008年にIAML年次大会を開催するが、それを目途に国立音楽資料・音楽情報センターをナポリ音楽院に設置することを視野においている、ポーランドは今大会を準備中に支部事務長が急逝するという悲劇があった、等々（日本の報告は荒川支部長の稿参照）。支部報告は金曜日の２回目のカウンシルにもいくつか持ち越された。

12日(火) 「ポーランドの音楽」をテーマのプレナリ・セッション。

「ポーランドにあるショパンの自筆」は若き国立図書館音楽部門司書が19世紀半ばにFr.リストが「ショパンの自筆は極めて稀」と述べた言葉を引用し、世界中にも稀にしか散在していないにしても、国内にも重要な自筆の楽譜(op.17、27、40)や書簡があることは誇らしく、ユネスコの世界遺産にも登録されていること、今なお引き続き国立図書館は、収集を意図していることを述べた。クラコフのMusica Iagellonica社がこの日のために復刻版を作り、展示コーナーで極めて安価で販売し、マズルカとワルツは、たちまち売り切れとなった。

「マズルカとポロネーズ：ポーランドの舞踊の歴史」は、固有の同一起源をもつリズムであり、16世紀半ばから19世紀にかけてマゾフシェ地方を中心に盛んに舞踊音楽として多用、18世紀後半になってマズルカとポロネーズにリズムと旋律が分化し、ヨーロッパ各地に流れていったその変容の背景には、他民族（ロシア、プロシアとオーストリア）の分割支配下の影響があることを述べ、それぞれ特徴が違うように感じられる民族舞踊のリズムが変遷・変化していくことを解述した。なおマズルカはマズル（ワルシャワを含むマゾフシエ地方の人々を指す）を語源とする。

「パデレフスキー・センターのコレクションとその活動」は、多才な音楽家パデレフスキー(1860-1941)の作品、蔵書、活動の全容。クラクフのヤギェウォ大学に寄贈された蔵書に基づき1974年に音楽学研究所内に設立された。写真、演奏会プログラム、録音資料、書簡など関係資料の収集も心がけ、1990年以降、演奏会日記、書簡集、全集などが刊行されている。主題目録も既に印刷に入っているとのこと。

ワーキング・グループ　ＩＲＭＡ（International Register Music Archiv 国際音楽アーカイブの登録）は、D.デイから英国図書館のCh.バンクスに座長を交代し、新たに立て直しが図られた。国立図書館、総合大学図書館レヴェルの研究図書館などアーカイブを扱うメンバーが声をかけられたらしく錚々たる陣容で集結し、アーカイヴ・コレクションの総合索引化が中心話題となった。サーチ・エンジンをかけてもGoogleで探しても、常にレヴェルの安定したサイトが入手できるとは限らない。UK&アイルランド支部は、Cecilia (http://www.cecilia-uk.org/）という音楽索引サイトをデザインしている。米LC、ハーバード大学のEAT、ドイツのCaliope、フランスのIRCAMなども類似の高品質で、スピーディに、有効な音楽アーカイヴ・コレクションに辿り着けるよう、誰の目にもアクセスしやすいアーカイヴ索引サイトを準備している。これらが直ちにIRMAのWGに繋がるわけではないのだろうが、今後の方向性を示唆する材料として挙げられた。

メタデータと書誌調整上の諸々の課題（目録委員会）は、

１）IFLAのFRBR（目録書誌の機能要件）の範例を題材に音楽作品における実際を解説した。音楽作品の多様な書誌の特質を捉えるためには、FRBRの考え方が柔軟で、適切であることを図示しながら述べていて、興味深い内容であった。時に日本語より外国語の方が説得性がある、という類の明快な論理性をもった発表で、難解な書誌機能要件をポジティフに受け止めることができたことは収穫だった。ユニホームタイトルの復権も示唆。発表者はフランス国立図書館のP.ル・ボフ。IFLAのS.ディヴィスの論文や言辞を度々引用している。詳細は「FRBR」と「StephenDavies」をGoogleで検索してみることをお薦めする。

２）オハイオ大学のA.J.ウィルソンは、「音楽資料メタデータ世代のインターフェイス評価」と題し、書誌項目単位でのエラーが、語義あるいは構造上の事由によるかを識別する統計表を作成し解読。インターフェイス作成への助言を加えた。これはインターフェイスだけではなく入力時点での標準記述の規則化が鉄則であることが分析結果として出ているためである。

ポーランドとフランスの録音資料（AV委員会）では、ワルシャワ国立図書館蔵のポーランド演奏家たちによるシリンダーから始まる初期の録音資料（ピアニストのJ.ホフマンなど）の紹介、そして複合的な歴史を背負った在外ポーランド系人の定義（18世紀ー19世紀の政治的移民、第二次

大戦までの経済的移住、第二次大戦以降の兵士としての移住、1980年代の連帯すなわち自主管理労組全国組織時代の移出）に沿った録音コレクションの解題がなされた。歴史の変遷が音によっても濃厚に表出して在るということだろう。政治を切り離せない文化を背負っている。一方フランスは、パリのCité de la Musiqueのメディアテーク機能を紹介。公共図書館として普及・教育機能を強調していた。多くの亡命者が再起を謀った地として知られるフランスに、ポーランド側から要請したデモンストレーションであったようだ。

13日（水）著作権委員会２は、先のアンケート結果のサイト更新を確認し、Code Fair Practiceに向けて、各国がどのような対策を講じているかが話題となった。独自の著作権HP(http://droitauteur.levillage.org）を維持し、陳情書も掲載しているフランス、アメリカは音楽図書館協会HP（http://www.lib.jmu.edu/org/mla）にガイドラインのサイトを、オーストリアはIAML支部HPでサイトをもち、人権としての著作物利用を掲げている。英国(副座長）はIAMLガイドラインに着手、等々（因みに日本は、音楽図書館協会HPにトピックス・コーナーを設け、著作権委員がこれを維持している）。委員会では、昨年よりさらに追加があったアンケート回答を加えると共に、2006年に向けて著作権についてのIAMLの立場を述べた陳情書案を作成する。これはIFLA原則を参照するといったプロセスが座長から提案され大筋での同意を得たと云える。

初めてセッションという形を会期内に設けた「手を伸ばして！私はそこにいます」（アウトリーチ委員会）は、米国の音楽資料の寄贈プログラム、ハンガリーはEU新加盟国の立場で、アウトリーチ補助を長年受けてきた先達としての経験とノウハウを、そしてパリ音楽院は資料受入れ担当者が、教育用資料や楽器、視聴覚機器などの寄贈を随時行っているなどの事例を報告した。アウトリーチ活動は特別なことではなく困っているときはお互いさま、手を伸ばして！という思いやりの活動。資料寄贈、財政援助、専門技述提供などが可能。今年は各国支部からの報告が少なく、日本の今期報告も会期に間に合わなかったのだが、筆者までお知らせいただければ、少し遅れてまたは来期には報告できる。まずはIAMLの当サイトで概要（http://www.iaml.info/outreach.php）を参考にしていただくと幸いである。

14日(木）「オンライン目録とシソーラス」（目録委員会２）は、ワルシャワ大学から、ユニオン典拠ファイル（1993年）と叢書所在目録（1995年）を国内の大学図書館と研究図書館（加盟49館）で始めていることが紹介された。

この「NUKAT(www.nukat.edu.pl)」のセンターはワルシャワ大学にある。

ラウンドテーブル「オントロジー(ontology)対シソーラス」は、その特性を述べることに留まったが、Rプロジェクトをも対象とした気宇壮大な主題検索手段として直ちに有効となるかどうか、フロアーからは具体的な有効性の提示を望む声が毎度出る。辞書の用語とコンピュータ・テクノロジーで云うところのオントロジーが同義語なのか類義語なのか、筆者にもまだよく解らない、というのが正直な感想。

RISM委員会は、グダンスクのRISM作業グループの仕事について、当地の音楽学校音楽理論研究所のスタッフから報告。ドイツで優勢とされているPIKADOシステムでアップしている。今や出版物、CD-ROM、オンラインで各国が蓄えたRISMデータをデジタルで保持し、公開している時代なので、その道具が有能であるかどうかで評価が分かれることも大いにある。

「本部の入力用ソフトウェアと、そのプレゼンテーション」は、デモンストレーションが中心だったが、上記のPIKADOは、インターフェイスのプログラミングが古い。 後発の支部が新システム導入に積極的で資料の書誌化と同時に、各国がシステムのヴァージョンアップする中、本部とのアクセスビリティ格差が広がっていかないのだろうか？　RISM日本支部を照準とするなら、準備段階で、書誌とコンピュータ・リテラシーの両面でのリサーチが必要となろう。

アーカイヴの移動へのチャレンジ（アーカイヴとドキュメンテーション・センター部会)は、「フランス国立図書館音楽部門のマニュスクリプト、音楽院資料の展望報告」が昨年に引き続き報告された(概要は25号　P.2~3オスロ会議報告９日(月）インフォメーション・セッション③「音楽目録BN Opalineの新機軸と変化」参照）。2007年計画に委ねられたWebOPAC、BN-Opaline plusへの一本化はさらに早まり、2005年末には移行が始まる模様だ。

「アーカイヴのデータ移行の課題：ニューヨーク公共図書館におけるケーススタディ」。舞台芸術部門は1980年代後半まで、多くのアーカイヴの調査分析を個々に始めていたが、あまりにも莫大なコレクション群であったため、デジタル化に向け全容把握に迫られた。1993年にチャレンジ精神のあるメンバーの意見に従い、主資料をカバーする書誌調整の機能装備することを決め、10万件の書誌レコードを入力することができた。しかしEAD（Encoded Archival Description 符号化記録史料記述）を導入、アーカイヴ・コントロールの発展的認識力をもって臨んだにも関わらず、何年も後に再認識したのは、データベースにさらに複雑な課題を生みだす書誌的解釈があると云うことだった。これは舞台芸術遺産のデータベース運用に向かうスタッフの直面する課題である。これは別の場にデータ移行する過程を目下学んでいる過程のフォーカスであり、既存アーカイヴを統合的に移行することの困難な場面がかいま見える。

他方、シアトルでデジタル・ライブラリ・コレクションの充実しているワシントン大学「シート楽譜を書架からデスクトップへ：CONTENTdmを用いた電子コレクション化」(http://db.lib.washington.edu/sheetmusic/）の報告。地域の音楽文化といえる既存のシート楽譜コレクション２種の電子化を行った事例。この部会の座長であるJ.

ツゥとシステム提供者の発表だった。大学のクラスで使う「お気に入り」サイトを意図しているCONTTENTdm（http://www.contentdm.com/）は、電子コレクションを形成できるシステムでシアトルに本拠を置くDiMeMa社のシステム。OCLCとも密接な関係を維持している。わかりやすいデータ移行のあり方の一例であろう。日本で多くなるだろうタイプで財政基盤さえあれば、今後増えていくだろう。

「RIdIMデータベース：ついに登場」（RIdIM）と銘打ってデモンストレーション。「RIdIM再訪：如何にしてニューヨーク市立大学の埋もれていた7000枚の音楽図像コレクション・カード目録をオンライン・アクセスに甦らせたか」の報告。パリのINHA(国立美術史研究所)に本部を移して以来、パリで合同会議が何度かあったことは伝わっており、各フィールドにそのソースを記載する項目を加えたことが強調されたが、これ以外具体的進展がさほど表面化しないままであった。2003年エストニア会議でオハイオ大学（OCLCの本拠）が電子化へ名乗りを挙げていたが、ノースカロライナ大学との連携に発展しての発表となった。目録電子化経験と技術を持つと思われる米国で一気に進展した。町中の道ばたでも売っている出盛りのフランボワーズを携え、お散歩がてら立ち寄りましたと云った風情のINHAスタッフがこのセッションにだけ現れ、そして姿を消したのが印象的であった。スイスの図像学者Dr.ゼーバー氏、V.ハインツRIdIM座長のコメントが今回表明されたわけではない。日本の伝統芸能や伝統楽器に関連する図像のデータベース化にも適応可能なものかどうか、今後に委ねられるだろう。

15日(金) 「音楽院図書館の合唱譜セット」（音楽教育機関図書館部会）は、図書館で管理運用していると大量部数で、運用（目録や貸出）が特殊な分野でもある。オーケストラ楽譜のセットものと類似している。ヨーロッパ内では、ILLも時に行われ、これをサポートする学外機関もある。合唱譜の実情を北欧の音楽学校から丁寧に紹介された後、Musica International社(http://www.musicanet.org/)が、合唱譜のヴァーチャル・ライブラリを紹介した。無料から有料のサービス提供もしている。Encore (http://www.peri.nildram.co.uk/encore.htm）の主宰者であるM.ジョーンズは、古くからのIAMLアクティヴメンバーでバーミンガムの公共図書館、教会聖歌隊に属し、英国支部長経験者だ。1995年に図書館から引退しているが、ブリティッシュ・ライブラリーとも共同と唱ったEncore！は、セットもの演奏譜情報にリンクするHPを維持している。商業ベースではなく活用可能なユニークな存在。

初日に続く２回目のカウンシル・ミーティングは、
①大会スケジュール(時間割）の確認
②ワーキング・グループの改変推移報告(IMAR, Hofmeister,仮称PeMIRA)と、新設ワーキング・グループ（Union Authority, ISBD(PM)）についてのディスカッション
③Fontesの新しい編集者Mareen Buja（NAXOS社香港勤務）の紹介（エストニア特集までは現ウァグスタッフが担当）
④HPのアシストにA.エスコットが参与
⑤2006年ヨーテボリ大会はIMSといくつか合同セッション、総会はIASAとジョイントする
⑥今後の大会予定(注2)
⑦各国支部報告の続きは、ルーマニアから初めて報告、スペインでは今秋IASA大会、など。

新Fontes編集長
Mareen Buja

午後、音楽情報：テクノロジーの進展（IT委員会）は、IRCAMのフィンガーフットによる「統合音楽情報（目録、電子アーカイヴ、イヴェント情報）の内部に、そして単一の音楽電子対象の内部にナヴィゲートするためのスタンダードを活用すること」。録音資料というものは、電子情報であれ、アナログ情報であれ、他のテキスト資料より電子媒体への置換が容易なので、目下音楽関係図書館界を揺るがしているともいえるが、総合的な音楽資料は録音資料だけでなくテキスト資料もあり、利用者へのコンテンツの提供者としての音楽図書館の役割はさらに多様に増大している。特にこうした情況の中で、知的所有権については、微妙かつ複雑であること、等々が述べられた。

一方、RIPMは今年で25周年を迎え、その200巻目を印刷刊行、他方50万レコードに及ぶ電子化されたRIPMON-LINEを、来年IAML、IAMIC、IMSによる合同セッションで提示することが予告された。

このセッションの最後は、イタリアのサンタ・チェチリア国立アカデミーのR.グリスレイで、AXMEDIS（Automating Production of Cross Media Content for Multi-chanel Distribution（www.axmedis.org）プロジェクトについての紹介。「多重チャンネル流通に向けたメディア相互コンテンツの自動制作」はEUがサポートしている。国際会議が今秋、フィレンツェで催され、コストダウンや著作権保護ツールなどについての方策がディスカッションされる(http://www.axmedis.org/axmedis2005/about.ht）。

午後後半にはクロージングセッションがあったが、今年は部会や委員会の世話人改選の結果報告、改変された委員会や作業部会の名称についてのディスカッションが中心となった。ISBD(PM)の立役者でもあったL.コーラル氏を始め今年も長年の大切な仲間がこの世を後にし、同僚から哀悼の辞が表明された。他はカウンシルと重複する項目が多いのでここでは省略しよう。

2005年10月20日

注１ An annoted catalogue of Chopin's first editions / ed. by Christophe Grabowski and John Klink (Cambridge Univ. Press ISBN: 0521819172)
注２ http://www.iaml.info/conferences.php参照

IAMLポーランド国際会議・RILM部門

関根敏子

国際音楽文献目録委員会（RILM）の会議は、２回おこなわれた。ひとつは公開、もうひとつは各国支部の実務担当者によるビジネス・ミーティング。

・７月12日（火）11：15-12：45
RILM公開セッション

今年のRILM部門は衝撃的な報告から始まった。まず、リルム国際本部事務局長Barbara Mackenzieが旅行をかねて早めに現地入りしていたところ、食中毒で緊急入院、症状が改善しないため帰国したというのである。書類は事務局メンバーが受け取ったので、議事進行には支障がなかった。もうひとつは、RILMアメリカ支部の創設者で支部長を1966年からつとめていたLenore Coral (1939-2005)の訃報であった。

（１）RILM（本部と支部）の活動2004-2005
韓国、アフリカ（数カ国共同）、エストニア、スイス、イギリスが支部を創設もしくは再開した結果、新しい収録文献数は30,000となり、前年比で50％もアップした。また、RILM国際本部内の新しい編集データベースiBis (Internet Bibliographic IndexingSystem）が軌道にのり、各国支部も送付文献の掲載状況をチェックできるようになった。ただしアクセスは、本部からパスワードを与えられた登録者に限られる。
RILM初の国際会議が2005年３月にニューヨーク（The Graduate Center of The City University of New York）で開催された。４日間で90の発表がおこなわれ、参加者は20ケ国以上におよんだ（なお、日本からは金澤正剛先生が参加された）。
RILMのサイトwww.rilm.orgがリニューアルした。またRILMのオンライン・データベースには、CSA、EBSCO、NISC、OCLC、Ovidという５つのディストリビューターからアクセスできるが、それぞれに特徴が異なる。詳細は、http://www.rilm.org/subscribe.html参照。
RILM回顧版1835-1966（RILM創設以前の文献を収録）の第４巻が刊行された。

（２）報告
恒例の開催国関係のレポート、今年は以下の３つの東欧諸国における音楽学出版についての発表がなされた。
1. Andre Balog（RILM編集委員）：ハンガリーにおける音楽学出版
2. Stanislaw Bedkowski（クラカウ、音楽学研究所、Jagiellonian University）：ポーランドにおける音楽学出版
3. Pavel Kordik（プラハ、Ustav pro hudebni vedu Akademie ved）：チェコ共和国における音楽学と研究出版の可能性

バログ氏はハンガリー出身だが、現在はアメリカに住み、『RILM Abstracts』(国際音楽文献目録)の編集を担当している。ソフトな物腰で、ハンガリー語、英語はもちろん、フランス語も堪能である。ベドコフスキ氏は、クラカウ大学（Jagiellonian University）の音楽学研究所所員で、今回の国際会議の裏方の中心人物のひとり、英語が堪能なことから、会議出席者から信頼され、とても人気があった。コルディク氏はプラハ在住の音楽学者（Ustav pro hudebni vedu Akademieved）で、発表はフランス語でおこなわれた。この３つの発表に共通するのは、政治や支配体制の影響を強く受けていること、また出版活動に制約があったせいか、文献資料がまだ少ないことである。あらためて日本の『音楽文献目録』に膨大な文献が収録されていることを再認識した。

RILMのブース。左端がバログ氏

・７月13日（水）９：15-10：45
RILM各国支部、実務担当者セッション

今回は、本部の新しいデータベースiBisによる文献登録システムに関する質疑応答が中心であった。まだ使用している支部は少なく、問題点についての本格的な議論というよりも使用法についての質問が多かった。iBisでは、送付内容が正しく掲載されているかどうかをチェックできるばかりでなく、コメント欄が添えられていて、変更を申し出ることもできる。実際に訂正がおこなわれた時には、本部コメント欄に記載されるという。その他にも、本部に使用者を申請してパスワードをもらえば、NISCにもアクセス可能であるということであった。ただし、送付文献のチェックはできるが、変更は不可能である。
なお、当日配布された資料には、再開されたイギリス支部の活動状況が記されていた。その他、43支部からの送付文献数や活動報告の表によれば、日本475は、ドイツ3000、アメリカ約1527、ロシア990、オーストリア713、フランス約679の後、全体で６番目であった。

・その他

最近では水曜の遠足後にRILMの親睦会が催されている。今年も会場の国立図書館近くのレストラ

ンでおこなわれたが、筆者の参加した遠足（ショパンの生家）が長引いたので、親睦会への出席は断念した。上記チェコのコルディク氏によれば、参加者は多かったが、残念なことにレストランで流れるポピュラー音楽の音量が大きすぎて、話が十分にできなかったそうである。

なお、公開セッションのおこなわれた会場の外（ロビー）にはRILMのブースがあり、『RILM Abstracts』などの出版物とともに、『Dining With RILM』と題された小冊子（US $14.95）が置かれていた。何だろうと手に取ってみると、それはまぎれもなく料理レシピ本であった！　なぜRILMが？ Executive ChefのTima Frühaufは序文で、音楽と食物や料理が昔から密接な関係にあったと指摘し、『RILM Abstracts』所収文献（たとえば、L.モーツァルトにとってのワイン、ヴェルディのオペラにおける響宴の場面など）を紹介、ロッシーニ、シューベルト、パガニーニなどと料理の関係が要旨や索引に見出されると指摘する。その後に、ニューヨーク本部スタッフが、アペリティフ、食前酒、サラダ、スープとシチュー、野菜、パスタとリゾット、肉、魚、デザートなど９部門にわたって自慢のレシピを紹介していく。最後には食材別と国別の索引が置かれており、日本の料理としては「お好み焼き」がある！　その執筆者Richard BROWNは、大阪出身の日本女性と結婚している。

日本からの会議参加者のうち４人

コンサート報告

関根敏子

ポーランドと言えば、ショパンの国というイメージがある。民俗音楽にしても、マズルカやポロネーズの印象が強い。とくに今年は、５年に１度のショパン・コンクールが開催される（2005年9月23日から１ケ月間）。しかしポーランド音楽は、10世紀後半にはキリスト教とともに教会音楽も導入されるなど、長い歴史をもつ。1364年に創設されたヤギェウォ大学（クラクフ大学）の図書館を訪れた時、同地の音楽学研究所員が「クラクフは戦火を免れたので当時からの蔵書がすべて残っている」と誇らしげに言った後、「ワルシャワは砲火にあって壊滅し、図書館の資料が１メートル以上もの灰になった」と手でその高さを示したのが印象に残っている。

今回の国際会議では、ほぼ連日のようにコンサートがあり、音楽にあふれた一週間となった。

・7月11日（月）　The Songs of Old Warsaw

”Warsaw Saint-Anna Choir”によるコンサートは、19世紀末から20世紀にかけてのポーランドの歴史をミュージカル風に紹介するという趣向。興味深いのは、合唱メンバーが個性的で、年齢や体格もさまざま、上手な人もいれば地声の人もいたこと。プログラム前半は、当時の市民の服装でさまざまな職業や恋の様相をコミカルに描き出す。後半は、第２次世界大戦後のワルシャワを描いた歌のメドレー。ワルシャワは徹底的に破壊され、市民たちは悲惨な生活を強いられていた。だが、歌にはワルシャワの町への愛着があふれていた。コンサート終了後、メトロの駅近くにあったホテルのレストランで、荒川先生と一緒にビールと伝統的なスープを。観光案内書によれば、日本のお味噌汁に近いと。パンも素朴な味でした。

・7月12日（火）　王宮コンサート

元王宮の美しい広間、豪華なシャンデリアの下で、17世紀ポーランドとイタリアの音楽を並べたコンサートがおこなわれた。この建物は、1944年にナチスによって破壊されたが、1988年に復元されたもので、現在は博物館となっている。このコンサートは、マリーニやフォンタナといったイタリア人作曲家以外は一般にはほとんど知られていないポーランド音楽史の重要な一面を示すものであった。

15曲中４曲が取り上げられているアダム・ヤジェンプスキは、17世紀を代表するポーランド人ヴァイオリン奏者・作曲家で、イタリアに１年滞在、〈カンツォーナとコンチェルト〉（1627の筆写譜）を残している。その他の作曲家も、イタリアを旅行するなどして影響を受けている。たとえばミコワイ・ジェレンスキの「聖体拝領唱」（1611）はヴェネツィアで出版されており，同地の華麗な様式を反映している。マルチン・ミェルチェフスキはヤジェンプスキの友人で、その作品はドイツをはじめロシアやデンマークまで名を知られていた。シトー修道会士スタニスワフ・S.

シャジンスキは、コンチェルトやソナタを書いている。いずれの作品も、イタリア風の流麗な旋律だが、和音の響きがどことなく深みをおびて聞こえてくるところがポーランド風と言えようか。

演奏は1990年結成の古楽アンサンブル「IlTempo」で、当日は創設者のSapiecha（vn）の師であるSimon Standageが加わっていた。その他、２人のヴァイオリンは17世紀のオリジナルを使用していた。

王宮でのコンサート

印象的だったのは、３つのヴァイオリンによるエコー効果。突然に後ろのガラス張りの扉が両側に開いたかと思うと、２人の奏者が奥へと姿を消した。ひとり残ったスタンデイジが奏でる旋律が、扉の向こうから２つのヴァイオリンによってエコーのように次々と繰り返される。Stawarz（cembalo）はフランスで活躍していた。Zalewski（viola da gamba）はギターの名手としてNYのリンカーンセンター出演の経験をもつ。

Mikolajczyk（sop）は経歴を見る限りでは留学経験がないようだが、個性的な声質をもち、高音から低音までむらがない。現代音楽でも高い評価を得て、初演を数多く託されているのも納得である。他に長いキャリアをもつイギリス人テノールOxleyも出演。

東欧圏でも最近は古楽器を使用したアンサンブルが増えているとは思っていたが、ここまで徹底してオーセンティックな演奏や楽器が普及しているとは予想外であった。

・7月13日（水）　遠足：ジェラゾヴァ・ヴォラ村

ジェラゾヴァ・ヴォラ村への遠足途中に、ショパンの両親が結婚式を挙げ、ショパンが洗礼を受けた教会に立ち寄った。ここでは、特別に村の年配男性６人による教会音楽（中世からルネサンスのアカペラで、不思議な書法の曲が多い）とオルガン演奏を聞かせてくれた。ショパンの生家では、コンクール入賞歴のある若い女性の演奏（30分ほど）があった。演奏後にピアノを確認したらKAWAIと記されていた！

・7月14日（木）　ワルシャワ音楽院：ショパンと同時代の室内楽

最初に演奏されたJozefu Krogulski(1815-42)のピアノ八重奏曲ニ短調（作品6）は、思いがけないほど充実した作品であった。ピアノと弦楽器（２ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバス）に管楽器（フルート、クラリネット）という独創的な組み合わせ。この作曲家は、ピアニストとしてドイツ・ツアーをこなし、指揮者、教師として活躍したが、ショパンよりもさらに若く27歳で世を去っている。響きのバランスがユニークで、他の楽器とのユニゾンが多いなど若い頃の作品という感じだが、意外に難曲である。

もうひとつ素晴らしい曲があった。21歳で夭折したAntoni Stolpe(1851-72)　の「劇的場面 Scène dramatique」。ピアニストの父親から手ほどきを受け、ワルシャワとベルリンで学んだ作曲家で、この作品はオペラの一場面のように、レチタティーヴォとアリアが交代する。ソリストのAnnna Piwkowskaは、この日の室内アンサンブル「CameratataVistula」の創設者でチェロ奏者Andrzey Wro'velの娘（ちなみに母親もチェロ奏者のElz'bieta Piwkowska）。その若々しく柔軟で音楽性豊かな表現力は、音楽一家に育った賜物であろう。

後半は、ショパンの音楽院時代の同級生 Jgnacy Feliks Dobrzyn'ski (1807-67) の弦楽四重奏曲（作品20）とショパンのポーランドの旋律に基づく幻想曲（ピアノはそのままでオーケストラ部分だけを室内楽に編曲）であった。

・7月15日（金）　フェアウェル・ディナー

会議の最後は、アメリカのミュージックホール風の演出とポピュラー音楽の演奏で締めくくられた。

・7月17日（日）　クラクフの王宮

古都クラクフへのツァーで王宮を見学した時に、広間で若い音楽家３人（ソプラノ、リュート、トラヴェルソ）がルネサンス風の衣装でダウランドの歌曲を演奏していた。王宮の大広間は、舞踏会がおこなわれた場所で、楽師用のバルコニーが上方にあったのだが、ガイドブックにも絵はがきにも楽師席が撮影されていなかったのは残念であった。

事務局だより

IAML 2006 Göteborg参加補助基金募集

2006年のIAML国際会議は６月18日から23日まで、スウェーデンのヨーテボリで開催されます。IAML日本支部では７年前から、日本の音楽図書館で働く若い人たちの国際会議への参加を支援するための基金を運用しています。荒川恒子支部長から会員に向けて11月２日、次のような要請を行いました。

「音楽図書館や音楽資料を取り巻く環境は、残念ながら昨今、財政的にも地位向上の点でも大変厳しい状況にあります。そこで働くライブラリアンは、その専門性を問われる時代でもあります。IAMLは本来、専門家集団の活動拠点です。IAML国際会議に参加し、活動する音楽図書館、ドキュメンテーション・センターそしてアーカイヴの実際を見聞することは、もう一度私たちの立場と方向を確認するためにも、大きな意義があると考えます。また会議開催地で音楽遺産の一端に出合える機会も見逃せません。

IAML日本支部は、７年前から次の提案をしております。そして、基金に参加してくださった会員の支援の下、2001年に初めて２人の若いライブラリアンが、そして2004年には１人の会員が、基金を活用して会議に参加することができました。それぞれの成果はニューズレターに報告されています。

次年度もどうぞよろしくお願い申しあげます。」

会員会議参加補助基金の募集要項は次の通りです。

１．募集対象　　団体会員、個人会員　他
２．募集時期　　年会費納入時、及び随時
３．金額　　自由
４．送金方法
郵便振替　00130-5-75629　IAML日本支部
銀行振込　東京三菱銀行六本木支店
普通1089206
IAML日本支部　代表　佐藤みどり

個人会員の年会費6000円と合算して、１万円をお送りいただければ、25人で１人の参加補助が可能です。よろしくご協力ください。

2006年国際会議の予告

2006年６月18日から23日まで、スウェーデンのヨーテボリで開かれる予定のIAML会議は、「Contemporary Classical Music」がテーマです。IAML (International Association of Music Libraries, Archives and Documentation Centres) - IAMIC (International Association of Music Information Centres) - IMS (International Musicological Society) の３組織が共同で開催する初めての国際会議となります。

スカンジナビア半島の中央に位置し、友好的、風光明媚な都市ヨーテボリで開かれる会議に参加しませんか。

概要は以下のとおりですが、恒例の小遠足、演奏会、市内観光なども計画されています。

Sunday 18th June. Welcome ceremony in Artisten
Monday 19th June. Welcome reception given by the City of Göteborg
Tuesday 20th June. Concert given by Kroumata Percussion Ensemble in the Göteborg Concert Hall
Wednesday 21th June. Excursions. A choice of five visits, among them an excursion to the rock carvings in Tanum
Thursday 22th June. Rogan concerto in Örgryte New Church
Friday 23th June. Farewell dinner with traditional Swedish mid-summer celebrations
Post conference tour to "Kingdom of Crystal"

詳細は本部のホームページをご参照ください。
http://www.smbf.nu/iaml-iamic-ims2006/

IAML 2006 Göteborg参加費用補助のお知らせ

IAML日本支部では、2006年６月にスウェーデンのヨーテボリで開催されるIAML国際会議に参加を考えておられる若手個人会員の参加費用の一部を補助します。

１．サポート対象：音楽図書館・大学図書館・公共図書館・その他音楽資料・音楽資料情報に携わっている機関（アーカイヴ、ドキュメンテーション・センター等）で専門実務に携わっていて、IAMLの活動に関心を持っている個人会員（非常勤講師等の研究者を含む）
２．サポートの内容：会議参加費用の補助
　１人１０万円(返済不要)
３．応募期間：2006年４月末日
４．応募条件：今までIAML国際会議へ参加したことがない個人会員
５．選考：無作為抽選
６．応募方法：応募用紙に記入のうえ、応募先へ郵送あるいは、メールで応募
７．応募先
郵送
〒106-0041 東京都港区麻布台1-8-14
日本近代音楽館内
IAML日本支部事務局長　長谷川由美子
e-mail
yumiko@lib.kunitachi.ac.jp
郵送の場合は封筒に、メールの場合は件名に、「会議参加補助申請」と明記のこと

公共図書館についてのアンケート

事務局長より、以下のアンケート回答が寄せられましたのでご紹介します。

「2005年の春、デンマークのKirsten Voss-Eliasson氏より、7月のIAMLワルシャワ大会の公共図書館部会での報告にむけて次のようなアンケート協力要請の文書が寄せられた。

１）公共図書館が所蔵しウェブ上で公開している音楽コレクションの紹介
２）音楽図書館員として日常使う無料サイトの紹介

事務局では公共図書館にお勤めの４氏と民音音楽博物館にアンケートへの協力を要請し回答を得た。

以下は日本支部が送った抜粋であるが、紙面の都合上アンケート項目に沿った部分だけとした。

公共図書館所蔵の特殊音楽資料検索には「日本の音楽コレクション」（音楽図書館協議会、2002）が便利だが英語版はないし、ウェブ上での目録公開はほとんど行われていない。しかし多くの場合、音楽資料は一般のOPACの中に含まれる。2002年5月現在の公共図書館におけるOPAC公開率は都道府県立図書館が72.3%、市立図書館56.1%である。音楽資料を多く有し、ウェブ上に目録を公開している図書館として愛知県文化情報センター、民音音楽博物館がある。

音楽にまつわるレファレンスは日常的にあり、楽譜の有無、楽譜の掲載確認（どの曲がどの曲集に収載されているか、など）、歌詞から曲名を調べる、CD等の音源の探索などが比較的多く受ける質問で、次のサイトをよく使用する。

Gakufu-Net
（http://www.gakufu.ne.jp/GakufuNet/）
月刊歌謡曲索引サーチ
（http://www.gekkayo.com/search/index.html）
Amazon.co.jp　（http://www.amazon.co.jp/ ）
HMV Japan　（http://www.hmv.co.jp/）
@Tower.jp　（http://www.towerrecords.co.jp/）
Tsutaya online　（http://www.tsutaya.co.jp/）
音楽の森　（http://www.minc.gr.jp/）

また公共的性格の強い民音音楽博物館からは以下のサイトに利用が多いとの回答を得た。
NACSIS Webcat　(http://webcat.nii.ac.jp/)
同朋学園大学図書館
（http://libopac.doho.ac.jp/dou/ser1new.htm）
東京都立央図書館
（http://www.library.metro.tokyo.jp/）
浦和市立図書館
（http://library.city.urayasu.chiba.jp/opac/mf_opac.htm）　」

IAML本部公共図書館部会からの要請について

公共図書館部会から、来年のイェーテボリ会議において発表者を求めるメールが届いています。

日本支部には公共図書館に限らず部会としての活動はなく、地方自治体の公共図書館での音楽担当者もいないこと、一般の公共図書館で図書館司書として働き、音楽に関心をもつ個人会員はおられること、公共の利用に供することを建前としている財団付属の図書館があることを、６月に事務局から本部公共図書館部会に回答しました。

また、同回答を公共図書館部会に送るとともに、日本支部内で公共図書館にお勤めの個人会員３氏と団体会員に公共図書館からのメールを転送しました。

さらに事務局では、以前機関会員であった東京文化会館の司書らに、本部の公共図書館の部会活動情報をお伝えしながら、再入会（機関あるいは個人会員の如何に拘わらず）を働きかける考えです。

会員名簿について

支部名簿は、３年前まで総会出席者だけに配られていましたが、2004年の総会で、日本語による支部名簿を作成し全員に配布することが決まりました。方法としては、全会員にアンケートを実施し、各会員が掲載に同意した項目のみを名簿に記すというものです。しかし、総会後のアンケートで回答が寄せられたのは半数のみでしたので、昨年度は、役員会の判断で名簿の作成を見送り、再度今年の総会で継続議題とすることになりました。

「個人情報保護法」との関係で名簿の扱いには注意が必要であること、また、２年にわたって継続審議となっているにもかかわらず、名簿が必要との意見が会員から挙がらないことから、現役員会は、当面名簿配布を行わず、「個人情報保護法」の定着を待って名簿作成の方法を含め、再度検討することにいたしました。

名簿は、事務連絡に必要不可欠です。名簿は、今後も従来通り会計で厳重に管理されますので、会員各位におかれましては、住所その他変更事項が生じた場合、速やかに会計にご連絡ください。

音楽文献目録

音楽文献目録委員会の編集発行による「音楽文献目録」の第33巻が10月に刊行されました。第33巻には、2005年６月までに公表された日本音楽およびヨーロッパをはじめとする諸外国の音楽など、音楽全般に関わる著書、大学紀要、雑誌論文等が約1500項目収録されています。

2004年4月から2006年3月までの任期で、構成団体である日本音楽学会、東洋音楽学会、日本音楽教育学会、音楽図書館協議会、IAML日本支部から各３名の委員が選出され、文献収集・採択・分類等の活動を行っています。

IAML日本支部の委員は、関根和江、長谷川由美子、山田晴通の３氏です。なお、３氏は来期も委員に再選されています。

事務局への連絡

IAML日本支部では、日本近代音楽館のご好意により、同館に事務局住所をおかせていただいていますが、同館には事務局スタッフが常駐しておりません。郵便物などのチェックは遅れがちになってしまいますので、お急ぎの連絡は事務局長の長谷川由美子まで直接お願いします。

[redacted]

Newsletter―国際音楽資料情報協会日本支部
第２５号

2005年12月25日発行
発行　国際音楽資料情報協会(IAML)日本支部
〒106-0041　東京都港区麻布台1-8-14
日本近代音楽館気付
http://www.iaml.jp